

国語 1次 正答率・講評

| 問題 | 正答率 (%) | | | | 講 評 |
|---------|---------|------|------|------|---|
| | 受験者 | | 合格者 | | |
| | 完全 | 部分 | 完全 | 部分 | |
| 問一 | 6.0 | 94.0 | 6.3 | 93.8 | 出典はジェーン・スー『貴様いつまで女子でいるつもりだ問題』（幻冬舎）による。 |
| 問二 | 1.8 | 67.3 | 1.3 | 76.3 | 東京で生まれ育った作者が上京してくる地方出身者に対して抱く屈折した思いがユーモアを交えつつ綴られている。東京出身者にとって「東京」は、私的な場としての地元と公的な場としての首都が併存する複雑な場所である。東京を離れることがなければ、別離によって生じる「故郷」という意識は生じ難い。だが、開発の中で失われていく懐かしい風景はある。ニューヨークへの出張で独特の高揚感や孤独感を体験した筆者は、地方出身者の心境にも歩み寄り、「東京」を相対的に捉えているが、その上で「故郷喪失」の寂しさも味わっている。 |
| 問三 | 69.6 | 30.4 | 76.3 | 23.8 | 問十四までが本文を中心とした設問、問十五から問十七までが他の資料と合わせた設問であり、問十八が全体を捉えた上で未来の「東京」のあり方について考える問題であった。 |
| 問四 | 67.3 | 32.7 | 80.0 | 20.0 | 参考資料の出典は小林敏明『故郷喪失の時代』と橋本健二『階級都市 格差が街を侵食する』である。前者では「故郷」という意識に目が向けられており、2011年の東日本大震災に関連する原発訴訟での「故郷喪失損害」も話題となっている。また、後者では現在一般化している下町のイメージが近代以降に新たに作られたものであることが述べられていた。参考資料を使った設問を通じて複数の視座が加わり、本文読解がより多角的なものに広がっていくような設問構成となっている。ちなみに、前者の資料の採用は期せずして2022年11月に公開された新海誠監督の『すずめの戸締まり』が含む問題意識と重なるものにもなっていた。 |
| 問五 | 56.0 | | 62.5 | | |
| 問六 | 52.4 | 39.9 | 58.8 | 36.3 | 問一は㉔において「洗練」という解答が多く見られた。他では㉕で「負」「破」、㉖で「創/相」「記/気」といった解答が見られた。問三は概ねできていたが、その中で4が慣用句ではないため答えにくかったようである。 |
| 問七 | 33.3 | 3.6 | 32.5 | 5.0 | 問五にある「まったく理解できませんでした」という表現で言われていることは、「帰省する場所がないために、周囲の子供たちは地方で楽しく過ごしているのに、自分にはその機会がない」ということである。理由説明として遠いものは避け、的確に答えているものを選ばなければならない。 |
| 問八 | 85.1 | | 93.8 | | 問六は㉗が選べていない解答が多かった。問七は空欄も目立ったが、「いつか私も東京に！」を抜き出している解答も多く見られた。 |
| 問九 | 0.0 | 70.2 | 0.0 | 73.8 | 問九は複数ある解答要素を五十字にまとめなければならない、難易度の高い問題ではあった。幾つか要素が抜けてはいるが、本文中の言葉を使つてうまくまとめられている解答もあり、約7割が部分点を獲得していた。 |
| 問十 | 43.5 | 4.8 | 55.0 | 3.8 | 問十はショーがもつきらびやかな舞台というイメージを持つことができれば、本文中から探しやすくなったと思われる。「東京のスタンダード」という解答も見られたが、ショーのイメージからは遠い。また、抜き出しで「巨」を「臣」としている解答も散見された。問十一は「みんなのもの」という表現から公的な「共有物」という理解を念頭に、説明の妥当性を考えながら表現の強すぎるものを避けて、慎重に選択肢を比べられると正解に辿り着けるだろう。 |
| 問十一 | 48.8 | | 61.3 | | 問十二ではZの正解率が芳しくなかった。「NY/地方/東京/地元」といった解答も見られたが、「地方出身者の心境を垣間見た」との繋がりも考えるとより適切な表現を選ばなくてはならない。指定の字数が二字であり候補となる表現が多数考えられるため、時間のかかる設問であったかもしれない。問十三も若干選びづらい問題ではあったが、合格者の得点率では75%と高かった。NY出張で感じた複雑な筆者の心境をまとめたものを選ぶこと。問十五はよくできていた。問十二と重なる問いでもあった。 |
| 問十二 | 28.0 | 64.9 | 27.5 | 71.3 | 問十六から問十七にかけての問題は追加で参考文献を読まなければならない、その分解答の負担が増すことになり、残り時間が少なくなった場合にはより厳しい設問となったことだろう。問十六は地理的な把握と現在の下町のイメージの登場に関する歴史的な理解が問われていた。 |
| 問十三 | 58.3 | | 75.0 | | 問十七のiiは認めるか否かの判断に対して理由を添えて述べることが求められていた。説明の妥当性がポイントであったのだが、理由説明の整合性がないものも散見された。ちなみに認めるか認めないかでほしい2対1ほどで、認めるという意見が多かった。 |
| 問十四 | 75.6 | | 82.5 | | 未来に目を向けるという意味合いが込められていたのが問十八の設問。東京出身者と地方出身者との意見のすり合わせは当然として、その上で具体的な都市設計を考えられるか、発想力が問われていた。解答ではテーマパーク化の推進や都市と地方の融合を目指すというビジョンも提示されたが、多くは分割による住み分けの提唱であった。これも一つの具体的な提案ではあるが、対立的な構図が保存されたまま東京出身者と地方出身者の区別がより明確になることで、両者の軋轢が拡大する危険性を孕むことは心にとめておく必要があるだろう。アイデアは良くても、表現力が追いつかず、うまく文章化出来ていない解答も見受けられた。 |
| 問十五 | 79.8 | | 93.8 | | |
| 問十六 (1) | 43.5 | 34.5 | 60.0 | 30.0 | |
| 問十六 (2) | 36.3 | | 45.0 | | 時間内に答案を書き上げるのが厳しかった者も一定数はいるが、得点の高い答案は当然空欄部分が少ない傾向にある。問十五以降の問題でどれくらい得点できたが大きなポイントとなった。記述問題への対応としては、短時間で文章にまとめる力が必要とされていた。読む力、書く力の総合力での勝負となる。また、語彙力は漢字や意味を問う問題に直結するだけでなく、文章読解や選択肢の吟味、記述問題における表現力にも影響を及ぼすものである。読んで理解できる語彙を増やすだけでなく、自分でもそれらの語彙を積極的に使うように意識していけるとよいだろう。 |
| 問十七 i | 21.4 | 0.6 | 25.0 | 1.3 | |
| 問十七 ii | 22.0 | 24.4 | 35.0 | 30.0 | |
| 問十八 | 3.6 | 56.5 | 5.0 | 65.0 | |

国語 2次 正答率・講評

| 問題 | 正答率 (%) | | | | 講 評 |
|-------------|---------|------|------|------|---|
| | 受験者 | | 合格者 | | |
| | 完全 | 部分 | 完全 | 部分 | |
| 問一 | 82.7 | 16.6 | 90.1 | 9.9 | 出典は金子由美子『思春期と育ち合う』（岩波ジュニア新書・汐見稔幸 編『子どもにかかわる仕事』より）による。 |
| 問二 | 18.2 | 80.1 | 21.3 | 78.7 | 中学校の養護教諭として勤める筆者が「子どもと関わる仕事」に携わっていく中で、現代の子どもたちの実態や抱える悩みなどに対応しているか、また、養護教諭として子どもたちにとってどのような立場でありたいかについて述べた文章である。養護教諭が子どもを支援していくために何をしているのか、どうしているのか、子どもたちとおとなとの関係性のあり方についてを読み取ることを求めている。 |
| 問三 | 97.2 | 2.8 | 98.5 | 1.5 | |
| 問四 | 75.4 | 24.6 | 81.7 | 18.3 | 以下、設問内容と講評とを掲げる。 問一は漢字の書き取り。画数の多い字があることで、正確な「形」をなすことが求められる。㊦「則」を「測」に、㊧「復」を「復」にする誤答が見られた。 |
| 問五 | 59.2 | | 69.8 | | 問二は語句の意味を問う。知識の問題でもあり、文脈把握の問題でもある。㊦、㊧の出来がよく、㊨、㊩で不正解が目立った。 問三はオノマトペの穴埋め。修飾と被修飾の適切な係り受けを問う。かなり高い正解率であった。 問四は副詞と接続詞の穴埋め。慣用的な使い方の知識、文脈把握力を問う。全体的に出来がよく、この部分の満点も多かった。 問五は文章内容の把握度を問う。書かれてあることから類推して事実レベルでの判断力を問う。 問六は比喩内容を的確に把握できているかを問う。 問七は現代社会において保健室が一般的に抱かれているイメージを「大変でしょう」という言葉から考える。「勝手に一人歩きしている」の比喩にも着眼する必要がある。 |
| 問六 | 69.7 | | 73.3 | | 問八は筆者の目指す「保健室像」を、本文の内容から読み取る内容整理問題である。キーワードの選定も問う。 問九は指定の形式段落から、養護教諭としての理想的なあり方を読み取り、要約する問題。単に本文中の語句を抜き出して繋げて答えただけの解答が多かった。 |
| 問七 | 69.2 | | 80.7 | | 問十は思春期の子どもたちを比喩している内容の読み取りと、文脈に表れている理由の把握とを問う。 問十一は一般的な「おとな」が求める「子ども像」を本文中から「具体的」に探して指定字数に合わせて答える。 問十二は傍線部を含む形式段落の内容の読み取りを問う。 問十三は「応援」＝「支援」であるということの読み取りを問う。 |
| 問八(1) | 62.3 | 37.4 | 65.8 | 34.2 | 問十四は、二つ後の形式段落以降から筆者の対応を読み取り、字数指定に従ってまとめる。「人と気持ちのよい関係性」を誤読したり、子どもに「考えさせる」という要素が欠けたりした答えが多く見られた。 |
| 問八(2) | 33.6 | 37.0 | 36.1 | 41.6 | 問十五は傍線部を含む形式段落の内容の読み取りを問う。 問十六は本文中に提示されている情報を的確に掴んでいるかを問う。 問十七は(1)で文章中で内容を把握する上で要となる部分の文脈把握力を問う。(2)では現代日本の教育の中で養護教諭が総合的に果たしている役割を理解した上でその職務上でのメリットと、一括集中型の対応がもたらすデメリットの内容についてを問う。限られた解答欄の中で的確に文章を構成する力をも問う。ここで、「本文の内容とこの記事とを踏まえ」を見落として見間違いの文言を書き連ねたり、方向性の異なる内容の答えを書いてきたりした者も散見された。 |
| 問九 | 0.5 | 97.4 | 1.0 | 97.5 | |
| 問十 | 88.4 | | 93.6 | | |
| 問十一 | 9.5 | 64.2 | 11.9 | 69.8 | |
| 問十二 | 68.5 | | 82.2 | | |
| 問十三 | 51.9 | | 55.4 | | |
| 問十四 | 16.1 | 73.2 | 21.8 | 69.3 | |
| 問十五 | 57.6 | | 73.3 | | |
| 問十六 | 48.1 | | 55.9 | | |
| 問十七(1) | 41.0 | 57.8 | 55.9 | 44.1 | |
| 問十七(2)メリット | 12.8 | 49.1 | 21.3 | 50.0 | |
| 問十七(2)デメリット | 12.3 | 50.7 | 17.3 | 58.9 | |

国語 3次 正答率・講評

| 問題 | 正答率 (%) | | | | 講 評 |
|--------|---------|------|-------|------|---|
| | 受験者 | | 合格者 | | |
| | 完全 | 部分 | 完全 | 部分 | |
| 問一 | 17.4 | 82.6 | 21.3 | 78.7 | 出典は鷺田清一『だんまり、つぶやき、語らい じぶんをひらくことば』（講談社）による。 |
| 問二 | 40.1 | 59.4 | 59.6 | 40.4 | 筆者が「だんまり」「つぶやき」「語らい」のもつ働きについて行った講演の記録を文章に起こしたものの中から、「語らい」の働きについて述べられた部分を本文とした。 |
| 問三 | 96.6 | 3.4 | 100.0 | 0.0 | 「語らい」とは一方的に相手に働きかけるものではなく、相手との共通点を認識するものでもない。「語らい」には、自分と相手との違いを認識し、今ある自分をいったん壊して生まれ変わるきっかけをつくる働きがある。 |
| 問四 | 19.8 | 79.7 | 19.1 | 80.9 | 寺山修司、河合隼雄の文章や対談を引用して「語らい」の本質を掘り下げている。寺山修司の「週刊誌やテレビのメディアがふくれあがるほど、沈黙は死んでいく」、河合隼雄の「毎回ニュアンスを、口調を変えて、ほう、ほう、ほう、はあ、というふうにやってみる。そしたら相手さん、しゃべりにくうても懸命に話してくれるよ」などは、示唆に富んだ表現である。 |
| 問五 | 87.0 | | 100.0 | | ●問一～四 語句の問題。漢字の書き取り、動詞を活用させる、副詞の意味、語句の意味を問う問題。基本的な事項なので失点をしないように解答することが求められる。 |
| 問六 | 52.2 | | 80.9 | | 問一 漢字の書き取りでは「割（く）」が難しかったようだ。「種族」を「種属」にしたもの、「卒業」を「率業」にしたものもあった。問二・三は良くできていた。問四B「裏切られてゆく」の本文中での意味では、ウ「期待に反する結果となってしまう」が正答だが、エ「味方と思っていた人から背かれる」を選んだものが見られた。 |
| 問七 | 62.3 | | 78.7 | | ●問五～十 傍線部付近の段落の要旨から答えられる問題。 |
| 問八A | 82.1 | 1.0 | 91.5 | 0.0 | 問六 「すら」の本文中の意味について読み取る問題。選択肢アを選んだものが見られた。「自分の暗くゆがんだ深い心理」が誤り。問八B言葉の抜き出し。「ことばをいったん呑み込む」が正解だが、「折り合いを付けようとする」を抜き出したものが見立った。問九 被災地の人の心理を選ぶ問題。オ「……ことばによるコミュニケーションの難しさ……」を選んだものがあったが、この段落の趣旨とは違う。 |
| 問八B | 40.1 | 1.0 | 51.1 | 2.1 | ●問十一～十五 複数の段落を見渡しながらか、語句を選んだり、記述をする問題。 |
| 問九 | 87.4 | | 93.6 | | 問十一 I 段落の要旨をまとめる論述問題。①「互いの違いが見えてくる」、②「他人の中にはじぶんにはわからないものがある」の二点が必要なのだが、①だけの答案が多かった。 |
| 問十 | 93.7 | | 95.7 | | 問十一 II 理由説明の論述問題。①「じぶんの根底がゆさぶられる」、②「これまでの自分が壊れてしまう」の二点が必要なのだが、どちらか一つだけの答案が目立った。I・IIとも部分点を与えている。問十二 正答はウなのだが、イという誤答が目立った。「両者の間にほんとうのコミュニケーションが成立する」という一般論として正しように思われる内容にとらわれてしまったようだ。問十三 語句の抜き出し。C「蝶」、E「聴かなかった」といった誤答が一部に見られた。 |
| 問十一 I | 19.3 | 70.0 | 27.7 | 66.0 | 問十五 I は、「語らい」のもつ働きの後半をまとめる問題で、文章を理解できているかが問われる。「今までの自分をいったん壊す」、「新しい自分に生まれかわる」を必要とする。 |
| 問十一 II | 6.8 | 40.1 | 4.3 | 55.3 | 問十五 II は、問十五 I を自分の具体的な体験に落とし込んで表現する問題。 |
| 問十二 | 55.1 | | 63.8 | | ①「自分と他者との違いや対立」、②「相手にあって自分の中にない何かを受け入れたり尊重したりする」、③「新しい考え方や態度が変化する」というステップで記述すると答えやすい。いずれも具体的例を入れることが必要。自分と相手との違いや対立から出発することがポイントで、ただ自分だけの経験譚や成長譚を記述しても得点にはならない。最後にある記述ということで空欄が目立ったが、記述してあれば何らかの部分点を与えたものが多かった。 |
| 問十三 | 13.0 | 65.2 | 25.5 | 68.1 | |
| 問十四 | 50.2 | | 70.2 | | |
| 問十五 I | 0.0 | 62.3 | 0.0 | 74.5 | |
| 問十五 II | 2.4 | 23.2 | 6.4 | 42.6 | |